

教 育 長 様

(様式1)  
令和 6 年 4 月 19 日  
(※受付番号 )

研究コース
A グループ研究A
校団コード (代表者校団の市費コード)
661456

代表者	校 園 名 :	大阪市立今里小学校
	校団長名 :	松永 かおり
	電 話 :	06-6981-8800
	事務職員名 :	栗田 有加
申請者	校 園 名 :	大阪市立今里小学校
	職名・名前 :	主務教諭 李貴子
	電 話 :	06-6981-8800

## 令和6年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	継続研究 (3年目)
2	研究テーマ	子どもの可能性を引き出す「個別最適な学び」「協働的な学び」の追究～教育DXの推進と1人1台端末を生かしたカリキュラムデザインの構築～			
3	研究目的	<p>テーマに合致した目的を項立てして記載してください。</p> <p>本校では、令和元年度より、研究テーマを「ICTを活用し、共に学び共に育つ授業を創造する～情報活用能力育成を目指した主体的で対話的な深い学びの実践～」とし、大阪市標準の機器環境に加えて、がんばる先生支援の活用により機器環境を充実させ、日常的に1人1台端末を活用した実践を積み重ねてきた。この取組から、2021年に教育工学会(JAET)より「学校情報化先進校」に認定された。また、2022年にはパナソニック教育財団において、実践研究校に選定された。今後に向けては、大阪市教育振興基本計画の最重要目標にも掲げられる「多様な児童の可能性を引き出し、ゴール設定型学習と『個別最適な学び』『協働的な学び』につなげることで教育DXの実現」を目指す。そこで、これまでのICTを効果的に活用した実践をもとに、学習の基盤となる児童の資質・能力を育成し「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行い、1人1台端末を生かしたカリキュラムデザインを生み出す。具体的な3つの取り組みを以下に示す。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 児童の情報活用能力を図る指標として作成した「情報活用能力チェックリスト2022年版」を更に改良し、児童の実態に応じたものに改善する。</li> <li>2. これまでに取り組んだ実践に、1人1台端末を生かした実践を最適に組み合わせることにより、年間を通して教科横断的に情報活用能力を育成するためのカリキュラムマネジメントとその一般化を図る。</li> <li>3. 「個別最適な学び」「協働的な学び」の追究をめざした授業展開により、情報活用能力とそれを支える言語能力、問題発見・解決能力を高める。</li> </ol>			
4	研究内容	<p>(1)研究内容の詳細 ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>探求的な学習の過程の中で「個別最適な学び」と「協働的な学び」を追究した授業展開について実践をもとに研究し、児童の情報活用能力とそれを支える言語能力、問題発見・解決能力の向上を図っていききたい。また、オンライン学習や1人1台端末活用の場面が増えたことにより、これまでに活用してきた「情報活用能力チェックリスト」のチェック項目の再検討と、それを活用した児童の情報活用能力の推移を検証する。</p> <p>○「個別最適な学び」と「協働的な学び」を追究した授業改善と、教員の指導力・授業力の向上。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの児童の興味関心に応じた学習活動や学習過程を想定し、指導者や児童がICTを効果的に活用することで、「個別最適な学び」を取り入れる。</li> <li>・学習過程において、他者との多様な学び合いや他校、他地域との交流を生かした「協働的な学び」を取り入れる。</li> <li>・個で取り組んだ「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、その成果を「個別最適な学び」に還元するサイクルを確立することで、教育DXの実現に向けた授業展開の工夫をする。</li> <li>・ICTを活用した協働的な学習の効果的な授業を実践する。</li> <li>・遠隔交流授業の年間を通じた計画を作成し実施する。</li> </ul> <p>○「情報活用能力チェックリスト2022年版」を活用することで、オンライン学習や1人1台端末を活用する場面に合った情報活用能力の向上。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オンライン学習や1人1台端末活用を意識した「情報活用能力チェックリスト2022年版」及びチェック項目の改善をする。</li> <li>・チェック項目を「ICT操作スキル」「情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」「情報モラル」の3つに分類し、教員・児童がそれぞれの項目をより意識した指導や学習ができるようにする。</li> <li>・「情報活用能力チェックリスト2022年版」を活用した児童の情報活用能の実態把握と課題解決力向上の要素を取り入れた授業の実践及び児童の情報活用能力の推移の検証を行う。</li> </ul> <p>(2)継続研究 [2年目] ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>昨年度の研究では「情報活用能力チェックリスト2022年版」を活用することにより、1人1台端末を活用する場面にあった情報活用能力を身に着けることができた。この情報活用能力チェックリストで見えた課題をクリアできるような内容を組み込んだ単元構成を工夫することで、低学年から系統的に情報活用スキルを身につけさせることができた。</p> <p>そして、教育DXの推進においては地理的制約に関わらず、また、学校に来ることができない児童に対しても、ハイブリット型の授業をすぐに実施できる体制づくりもでき「いつでも、どこでも、だれとでも」と、これまでのICT活用にとどまらず、一歩進んだ実践を積むことができた。</p> <p>課題としては「情報活用能力チェックリスト2023年版」が、学年に応じた内容になっているのか。児童に分かりやすい目標になっているのかなどを再検討し活用する必要がある。また、情報活用能力チェックリストの結果から「情報活用」の項目の「うまくいかないときに改善するための問題点、解決方法を見つける」の項目においては肯定的な回答がどの学年も低く「問題発見解決能力」についての課題が残った。</p> <p>もう1点は、協働的な学習の際に個で作ったデータ活用の効果がうまく発揮されなかった場面があった。児童が作った資料を共有した際に、比較しやすくするための教師側の工夫が必要であるなど、クラウド上にあるデータの効果的な活用法についての改善を図っていく必要がある。</p> <p>○主体的・対話的な学習を目指す中で、児童自身が「チェックリスト」を持ち自己評価したり、これまでつけた力を発揮しながら学習計画を考え、より良い学習方法を考えたりするなど、児童が活動を調整し、進める機会を取り入れた活動を取り入れていく。</p> <p>(3)継続研究 [3年目]</p> <p>情報活用能力の育成に向けて本校独自に作成した「情報活用能力チェックリスト」に改良を加え、複数年に渡って継続的に活用することで、児童の操作スキルや情報活用スキルは十分に育まれた。また、学期ごとに実施するチェックリストの結果分析をもとに、日常における学習指導の改善を図った。これにより、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、他者との協働による相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める対話的な学びが実現できた。以上のことから研究成果として、児童の思考力・表現力が育まれ「書く力」「読む力」「話す力」に向上が見られた。今後に向けては、令和の日本型学校教育が目指す「子ども主体の学び」の実現を図り、児童が見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる学習の過程が実現できているかどうかを検証していく。また、実現を目指す具体的な姿として、ICTの有効的な活用が重要であり、これまで培われた情報活用能力を最大限に生かし、3年間の研究成果とする。</p>			

5	活動計画	<p>日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。</p> <p>4月【研究企画会】研究テーマ、研究の進め方、見込まれる成果等について検討する。 【研究全体会】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度までの成果と課題をふまえ、研究内容の焦点化を図る。</li> <li>・先行研究をもとに年間計画を立案する。</li> <li>・「情報活用能力チェックリスト2024年版」、教員アンケートを作成する。</li> </ul> <p>【研究全体会】年間計画の共通理解を図る。</p> <p>5月研究授業年間計画作成（公開授業に向けた授業者、指導案のひな型、研修日程・内容等） 「情報活用能力チェックリスト2024年版」実施・分析（第1回）、教員アンケートの実施・分析</p> <p>7月【授業研究会①】（研究協議会・指導案検討会）</p> <p>7月【全体研修会①】講師 園田学園女子大学教授 堀田博史先生</p> <p>【授業研究会②】（研究協議会・指導案検討会）</p> <p>10月「情報活用能力チェックリスト2024年版」実施・分析（第2回）</p> <p>【授業研究会③】（研究協議会・指導案検討会）</p> <p>11月【授業研究会④】（研究協議会・指導案検討会） 【授業研究会⑤】（研究協議会・指導案検討会） 【がんばる先生支援 研究発表会】 公開授業・研究協議 指導助言 園田学園女子大学教授 堀田博史先生</p> <p>12月【授業研究会⑥】（研究協議会・指導案検討会） 【授業研究会⑦】（研究協議会・指導案検討会） 【授業研究会⑧】（研究協議会・指導案検討会）</p> <p>1月「情報活用能力チェックリスト2024年版」実施・分析（第3回） 【授業研究会⑨】（研究協議会・指導案検討会）</p> <p>2月【研究推進委員会④】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学力経年調査の結果分析</li> <li>・教員アンケートの実施・分析</li> <li>・がんばる先生支援報告書作成・提出</li> </ul> <p>3月【研究推進委員会⑤】研究のまとめ作成 【研究全体会・全体研修会⑥】次年度へむけて、本年度の成果と課題の共通理解</p>
		<p>出張を伴う研究会への参加、外部講師を招聘する研修会の実施等、経費執行が必要な取組を記載してください。</p> <p>・授業研修会の講師・授業研究会の指導助言：園田学園女子大学 堀田博史教授 年2回実施</p>
6	見込まれる成果とその検証方法	<p>(1)継続研究（2年目、3年目）において検証方法の変更の有無を記入してください。</p> <div> <input checked="" type="checkbox"/>変更しない。             <div>理由 経年にわたって、成果を検証するため。</div> <input type="checkbox"/>変更する。           </div>
		<p>(2)大阪市教育振興基本計画に示されている、「<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>」および、「<u>教員の資質や指導力の向上</u>」について見込まれる成果を端的に記載し、その成果について客観的な指標により、必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。（いずれかに<input checked="" type="checkbox"/>を入れてください）</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <div> <input checked="" type="checkbox"/>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上           <input type="checkbox"/>教員の資質や指導力の向上         </div> <p>個で取り組んだ「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、その成果を「個別最適な学び」に還元するサイクルを確立することで、児童の情報活用能力とそれを支える言語能力、問題発見・解決能力の向上をめざす。</p> <p>《検証方法》</p> <p>学力経年調査の国語科の記述式の回答結果において「自分の考えを書く」出題分野の正答率を60％以上にする。また、学力経年調査や年度末の校内アンケートにおいて「学級の友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができていますか。」に対して肯定的に回答する児童の割合を90％以上にする。</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <div> <input checked="" type="checkbox"/>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上           <input type="checkbox"/>教員の資質や指導力の向上         </div> <p>児童が主体的にICTを活用し、協働的な学びや言語活動を行うことによる児童の情報活用能力の向上</p> <p>《検証方法》</p> <p>児童に対し情報活用能力チェックリストを年度当初、および年度末に実施し「情報活用」の項目において、全学年とも事後の平均を90％以上にする。</p>

6	見込まれる成果とその検証方法	<p>【見込まれる成果3】</p> <p><input type="checkbox"/>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>教員の資質や指導力の向上</p> <p>教職員のICT活用スキルや授業力の向上</p> <p>《検証方法》</p> <p>教員のICT活用指導力アンケート（文科省「学校情報化調査」）において、すべての項目における平均値が3.5以上となるようにする</p> <p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>教員の資質や指導力の向上</p> <p>ICTを活用したこれまでの実践を整理し、学習の基盤となる資質能力を育成し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と、1人1台端末を生かしたカリキュラムデザインの一一般化。</p> <p>《検証方法》</p> <p>1人1台端末活用の年間計画・単元計画を作成し、HPに公開し一般化を図る。</p>						
7	研究成果の共有方法	<p>◆研究発表【必須】 報告書提出日（令和7年2月21日）までに必ず行ってください。</p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="461 775 1369 835"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 6 年 11 月 20 日</td> <td>場所</td> <td>今里小学校</td> </tr> </table> <p>◆waku<sup>x2</sup>.com-bee掲載による共有【必須】</p> <p>○掲載の日程（予定）</p> <table border="1" data-bbox="461 907 967 967"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 7 年 2 月 20 日</td> </tr> </table> <p>◆他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p>	日程	令和 6 年 11 月 20 日	場所	今里小学校	日程	令和 7 年 2 月 20 日
日程	令和 6 年 11 月 20 日	場所	今里小学校					
日程	令和 7 年 2 月 20 日							
8	代表校園長のコメント	<p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>本研究は、大阪市教育振興基本計画の最重要目標3の学びを支える教育環境の充実の基本的な方向6「教育DX（デジタルトランスフォーメーション）」にも書かれているように、日常的に子どもたちがICTを主体的に活用し、多様な情報を選択・活用しながら情報活用能力を高め、主体的な学びを通じて育成される資質や能力を円滑な学びにつなげていくことを目的としています。そのために、子どもの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を追究した授業展開について深く掘り下げていきます。さらに、ICTを効果的に活用し、これまで本校の研究成果を最適に組み合わせることで、教育の質の向上が見込まれます。そして、これらの研究内容は、令和4年3月に改訂された「大阪市学校教育ICTビジョン」のめざす子ども像を育てることにもつながります。</p> <p>なお、本研究を進めるにあたっては、園田学園大学の堀田博史教授にご協力・ご指導いただく承をいただいております。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>研究1年目では1人1台端末の活用において低学年から系統的に場面にあった情報活用能力を身に着けることができ、大きな成果をあげることができました。しかし情報活用能力のうち、うまくいかないとときの改善するための「問題発見解決能力」において課題が残りました。今年度はその課題の解決とともに、協働的な学習の際に個で作ったデータ活用の効果的な共有方法や比較活用のための教師側の授業力の向上、クラウド上にあるデータの効果的な活用法についての研究を深めていきます。</p> <p>なお、本研究でこれまで以上に主体的・対話的な学習を目指すために、桃山学院教育大学の木村明憲講師、園田学園女子大学の堀田博史教授にご協力・ご指導いただく承諾をいただいております。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>本研究を2年間続けてきて、児童の1人1台端末の操作スキルは格段に向上しました。児童への指導や新たな取り組みのために教員のICT活用スキルや操作スキルも向上しています。協働学習アプリを多岐にわたる方法で活用していることで、児童は自ずと「主体的・対話的で深い学び」につながる学習活動を行うことができています。情報活用能力がついてきた今年度は、情報活用能力の育成場面に取り組みつつも情報活用能力を発揮させるための活動や内容について研究を深めていきます。また、これまでの取り組みをまとめICT年間活用計画を作成・活用してきましたが、今年度より、新教科書に変わったため、これまでに年間活用計画を加除・訂正しながら再考していくよう取り組んでいきます。</p> <p>なお、本研究を進めるにあたっては、園田学園大学の堀田博史教授にご協力・ご指導いただく承をいただいております。</p>						